
暗殺物語～登場人物紹介＆あらすじ～

神の詐欺師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗殺物語～登場人物紹介&あらすじ～

【NNコード】

N5863Z

【作者名】

神の詐欺師

【あらすじ】

小説にて記載。
ぜひひらください。

暗殺物語

あらすじ

ある、夜から突然始まつた。原因不明の暗殺事件・・・。
しかし、暗殺される人たちはみな囚人ばかりだつた・・・。
暗殺に勤しむ、4人（1人=犬あり）のギャグ暗殺ストーリー（長編）

登場人物

隊長・・・偽世 いせ 神域 しんい 女

性格は黒くてボケでオカソな人。作戦をたてたりするのは、めんどうくさいので他の隊員に任せているものぐさ野郎。しかし、やるときはやる。神というフレーズにやたら反応する。

副隊長・・・天使 あまつか 至宝 しほう 女

男っぽくてお人好し。神域に忠誠を誓つ。何もかもカリスマ的にこなす。

冷? なにわ 腐? ほくと

隊員・・・浪速 なにわ 北斗 ほくと 男

いじられ役。 ポチ によく噛まれる。男なのにしぐさがかわいい。

下僕・・・ポチ 不明

犬。しかし、いろいろ変化が可能 人間にもなれるブツトビわんこ（おとり役多）男口調で話す。

組織名・・闇鳥

暗殺物語～第1章～（前書き）

いよいよ、本編突入です！
お願いします！！（*^-^）▽

ミッション1

ある、夜の事・・・

今日も動く4人の影。ひそかにいるよつで何処となくめだつその組織はどこかへ向かつてゐる様子であった。

「今日のミッションなんだろうね。」

と、つぶやく隊長、偽世神域。彼女は今日は機嫌がいいのか鼻歌が聞こえてくる。

「さあ・・・でも、暗殺の依頼は楽しいし。いいんじゃない?」

あつさりと変なことを言つ副隊長、天使至宝だが彼女はこの組織では結構まともな部類に入る。

「そつかあ！ 楽しいもんねえww(黒)」

「つて！ おとり役のこつちの身にもなれよー いつまちまちつとも楽しくなんかないぜつ！！」

と、ツッコミをかます犬・・・いや、下僕ポチ。

「しょうがないんじやないかな・・・。警察に捕まるのいやだし
れ」

冷静だがあまり根性の無いような声を出しているのは隊員 浪速北斗。このような声を聞いてると性別が分からなくなる。まあそこが可愛かつたりするのだが・・・。

「チツ！ まったく俺がいなかつたらなんもできないお前等に言われたかないぜ！」

「犬のお前に言われたくない。」

ポチの言つ事を倍返しで返した神域。結構胸に突き刺さったのか
ポチの顔がショボーンとなる。

ポチのショボーンは究極にお似合いだ。

すると、上から急に手紙のようなものが降つて來た。

闇鳥のミッションの伝え方はこんな感じだから、いつミッションがくるかわからない。

神域は手紙を拾い上げると、中をのぞく。

・ミッション・

今日、21時までに悪人「パネル・ソーラー」を暗殺せよ。
この手紙は自動的に小爆発するので注意。

「…………」

最後まで読みを終ると、全員ギックリした。
(バ、ばばばつばばばつばばば爆発だとおおー！)
場を理解した神域は、手紙をポチに食わせた。

ボフンッ！

ポチのなかで、手紙が爆発したようでポチの口からは、黒い煙が出ていた。

「ふ〜 危ない危ない」

「さすが、神域！ 僕たちに傷ひとつないよー！」

グツとガツツポーズで至宝が褒めた。

「アハハ。 ポチたばこ吸ってるみたいだね〜 〜〜

北斗は笑っていた。

「まあね！ 神ですから」

「おーまーえーらあー！！ この俺をなんだと思つてやがるーー！」

「犬」

3人が声を合わせて言つとやつぱりポチはショボーンとした。

「よしつ。 ジやあ今日のミッションをまとめて実戦に入ろう。 至宝、よろしく」

「ああ。 今日の依頼は悪人「パネル・ソーラー」の暗殺だ。 パネル・ソーラーは勝手に人の家のソーラーパネルを取り換えているらしい」

「名前おかしくないですか？ しかもソーラーパネルの取りかえつ

てえらいじゃないですか？」

と、疑問に思った北斗だが、神域も同じことを考へていたようだ
「悪人じやないのを暗殺するのは気がひける・・・」

「ああ、悪人みたいだぞ？ ソーラーパネルを交換するにも古いの
と交換し、交換代で金もまきあげてるらしいんだ」

「そりや、悪人だね・・・」

「まあ、それほど手のかかるやつじゃないみたいだしテキト 行
きますか」

「うじやーーー」

少しだけ、ミッションが幕を開けた・・・。

暗殺物語～第1章～（後書き）

誤字脱字があつたらすいません・・・。

グダグダでしたね～。

暗殺物語～第2章～（前書き）

せつや、書き込んだのにヒカー起きてやり直しです・・・。
ハア・・・。

「じゃあ、そろそろ向かいますか！」

と、神域が言った。

「そうだな。ちょっと待つてで・・・出た！ これがパネル・ソーラーの住所だよ

至宝がケータイをいじつて言った。

今更、暗殺に住所を使う暗殺組織なんて闇鳥くらいしかいないであろうがそのあたりはスル しよう。

「じゃあ、出発。」

と、3人がいっせいに動き出したが、ポチだけ少し出遅れていた。

「ここがパネル・ソーラーの家か・・・」

という神域に北斗が付け足すように言った

「意外とショボイね・・・金奪つてるくせに・・・」

「まあいいだろ。どうせこの家はもう来ないし、記憶にも焼きつけるほどものじゃないだろ。こんなボロくて汚くてポチみたいな家」

と至宝が言つと

「そうだな。・・・つておいいい！さつきポチみたいって言つたよな！？ねえ！？言つただろコンチクシヨー！？」

やはりポチがツッコンできた。今回のツッコンはノリツッコンだつたがあまりうまくないうえにムカついたのでスル をした。全力で。

・・・のちに、このスル はマク ナル のドライブスルーを注文しないで本気でスル するスルーと名付けられた。

暗殺物語～第2章～（後書き）

なんか、消えちゃったのがあまりにショックでギャグなどいじるだけを書かせていただきました。
短くてすいません。

暗殺物語～第3章～（前書き）

今のところ毎日更新中です。
応援お願いします。

「じゃあポチ。 中に何人いるか見てきて」「
と、かる〜く言つ神域。 いつもこんな感じかといふとそうでもな
いのだが今日のミッションはいつにもましてショボイ依頼だつたか
らなのかもしれない。

「おい。 さつきの俺のツッコミは無視か。 無視なのか。」「
あ〜、そうだつ！ 今日は誰がやる？？」

「そうだな〜・・・・」

話が流しそうめんのようにどんどん進んでいくのにもかかわらずポ
チだけは誰にも取られずそのまま落ちていったそうめんのようだつ
た。あの後、スタッフにおいしく頂かれるがなんか悲しいやつだ。
「ん、今日は至宝に譲るよ〜！ 私と北斗は外でウノでもしてよ
〜！」

「えつ！？ ウノ？ 神域ウノ今持つてるの？」

と、急にウノをやると言い出した神域に北斗がまじめに聞き返す。

「・・・今のボケなんだけど。」

「えつ？・・・・」

「ボケ。」

「あつ！・・・ああねえ〜」

この時北斗は思つた。『俺今日が命日かな。 でもパネル・ソーラ
ーと同じ命日は嫌だな・・・』と。

「あのせ〜で、俺は結局中を見てくればいいんだな？ 神域。」
ポチが空気を読まず神域に話しかけた。 神域の殺意は、北斗から
ポチに一瞬にして変つた・・・その瞬間神域がものすごいスピード
でポチを尻尾をつかんでパネル・ソーラーの家に放り投げた。
バリー―――ん！

ガラスが割れた音がして中からパネル・ソーラーであろう人の叫び
声が聞こえた。どうやら一人のようだ。ぽカーンとしていた北斗は

至宝の声で正気に戻される。

「よし。さすが神域だな！ あんなにも早くターゲットが1人だけわかるなんて！・・・じゃあ北斗！俺が殺してくる間、神域の世話よろしくな。」

「あっ！ ちょっと！ 至宝！」

北斗は神域と2人きりになつたがなにかを和やかに話す雰囲気ではなさそうだ。なぜならめっちゃ笑つてるけど殺氣がある。まだ人をやりたりないような笑みだ。北斗は思ったここでなにかを話した方がいいのかと・・話した方が殺気がまぎれるんじゃないかと・・・

「あっあのさ・・・ウノやる？？」

神域の目が北斗を向いてキラーンとなる。怒っているかなり怒つている。北斗は一步後ずさりをして

「ナンデモナイデス

と言つた・・・。

暗殺物語～第3章～（後書き）

あれ？ まだ殺せない！！

次回は至宝＆ポチ側を書かせていただきます

暗殺物語～第4章～（前書き）

強風によりインターネット繋がらず・・・
無念です・・・。

一方の至宝＆ポチは・・・

「くつそ・・・神域め！なにしてくれてんだ・・・あやうへンカマトウが見えたぜ・・・」

とつぶやくポチをずっと変な目で見ていくやつがいる・・・。そうパネル・ソーラーだ。

「なんだこの犬・・・ウザつ！ しつし！」

「ウザいとはなんだウザいとは！ 失礼な！」

「犬が・・・話した・・・。ああそうか疲れてるんだな・・・お金巻き上げるのにかなり怒ったからな」

「おー！ いらでめえ現実逃避すんな。」

なにげに会話が成立している（？）なか至宝はすきを狙っていた・・・

・暗殺の時を・・・

「・・・と思ったがこんなチンチクリンなやつのすきを狙つて殺しあつて楽しくない・・・いつそ恐怖からのじわじわタイプでいくか。」

至宝の心の声のはずだが楽しみすぎて声に出していたようであった。そのためもちろんパネル・ソーラーも気づく。

「！ 誰だ！ 出てきやがれ！」

「ども はじめまして！」

「・・・・・・・・」

パネル・ソーラーは至宝のヤバさを悟ったのか押し黙る。しかし

「お前は誰だ。俺に何か用か？ 用がないなら殺すぞ。」

と至宝に向けて銃を向けた。

すると、至宝は最初の軽い口調とは裏腹に

「・・・ わようなら」

と言った。

パネル・ソーラーは唖然としてしまった目の前にいる女の恐怖で・

・

至宝はパネル・ソーラーにすごいスピードで近づくと銃を奪い、パネル・ソーラーの頭にあてた。

「なにか言い残すこと……あるか？」

至宝が聞く。あまりの恐怖にパネル・ソーラーの口はパクパクとしていてとてもじゃないが喋れる状態ではなかつた。至宝はそれを確認すると目を閉じ、ヒキガネを引いた。

パンツ・・・・・

それは静かな夜の事。一人の囚人がまた1人死んだ・・・。

（深夜）

「あゝ肩こつた。」

「オツカレさまだね！至宝！ん。北斗！肩もんでもやつて！」

「りよ・・・了解！」

先程、神域と北斗になにがあつたかは知らないが完全に北斗は神域を恐れていた。

「じゃあ・・・至宝！さつきの彼の来世は何だと思う？」

神域がそう聞く。へんなことを聞いているが闇鳥は殺した人の来世を考えるのがお決まりだ。来世も悪い人に生まれてこないように・・・。

「・・・・・ポチにつくノミ・・・・かな」

「・・・・ナイスアイデア！つーかポチちゃんとシャワー浴びるよ

（www）

「おいっ！おまえらしい加減にしろ！つたく・・・」

「ポチ。大丈夫？怪我してるけど・・・いつ作ったの？こんな傷？」

北斗がポチに心配そうに言う。

「ガラスに投げられた時だよ・・・」

「ハハ。自業自得だね！」

「お前は心配してるとかバカにしてるのかどつちなんだよー。」

「もちろん。バカにしてるにきまつてるじゃないかー!どーしたの

?今更」

・・・・・

翌日、パネル・ソーラーが殺されたことがわかり。
新聞の一面を飾った。

ツシヨン1 - Fine -

II

暗殺物語～第4章～（後書き）

ミッション一終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5863z/>

暗殺物語～登場人物紹介&あらすじ～

2011年12月25日14時53分発行